別紙様式第４号

学 位 論 文 の 要 旨

保健学専攻　生涯保健学分野 成人保健学領域	氏名	島田　岳

題　目

A multicenter, randomized controlled trial of individualized occupational therapy for patients with schizophrenia in Japan

（統合失調症患者に対する個別作業療法：多施設共同ランダム化比較試験）

要　旨

統合失調症治療では，精神症状の軽減だけでなく，中核障害である認知機能障害を改善させ，再発の予防と転帰の向上を図り，リカバリーの達成を支援することが重要である．認知機能の改善とリカバリーの達成に向けた支援では，対象者の回復状態や生活課題を考慮した個別介入が必要である．しかし，現行の精神科作業療法（OT）の診療報酬体系は，1974年に長期在院患者に対する集団的処遇を想定して策定されたもので，短期入院患者への個別介入を必要とする現代の精神科医療の実情にはそぐわない．臨床では従来の集団的処遇に基づく OT（集団 OT）を基本に，必要に応じて一部の対象者に部分的に，個別介入に基づいた OT が実施されているに過ぎない．そこでわれわれは，急性期統合失調症患者を主対象として認知機能やその他のアウトカムの改善を図り治療への参加を促すことを目的に個別 OT プログラムを作成した．本研究では，通常治療の集団 OT に個別 OT を加えた群（個別 OT 群）と集団 OT のみを実施した群（集団 OT 群）を比較し，統合失調症に対する個別 OT の効果を検討した．個別 OT の効果が実証されることによって，個別 OT の普及促進や精神科 OT の診療報酬改正に繋がり，精神科医療の質の向上に寄与できるものと思われる．

DSM-5で統合失調症または統合失調感情障害と診断された新規入院患者をランダムに個別 OT 群と集団 OT 群に割付ける multicenter, single-blind, randomized controlled trial を実施した．個別 OT は，動機づけ面接，セルフモニタリング，訪問指導，クラフト活動，個別心理教育，退院プランの作成で構成され，作業療法士とマンツーマンの時間を設けて実施され，OT 時間の半分以上を個別 OT の時間にあてた．集団 OT は，集団での身体運動，手工芸，心理教育など，各施設の週間スケジュールに沿った通常の OT プログラムを実施した．評価は，割付け前と退院時または入院3ヵ月後に，統合失調症認知機能簡易評価尺度（BACS），統合失調症認知評価尺度（SCoRS），社会機能評価尺度（SFS），内発的動機付け尺度（IMI），機能の全体的評定尺度（GAF），陽性・陰性症状評価尺度（PANSS），Client Satisfaction Questionnaire8項目版（CSQ-8）を実施した．解析は，Intention-to-treat analysis を実施した．群による違いを検討するために，対象者，研究実施施設，研究実施施設と群の交互作用をランダム効果，年齢，性別，入院回数，ベースラインスコア，群，時間，群と時間の交互作用を固定効果とした混合効果モデルを用いた．なお，BACS，SCoRS の解析には，ベースライン時の IMI 合計スコアも固定効果に含めた．効果量の指標は Cohen's d を用いた．検定の有意水準は Bonferroni 法で補正し，両側 $p<0.05$とした．

260名について適格性が評価され，基準を満たした136名が研究に参加し，個別 OT 群（n=68,

男性34名，41.39±11.04歳）と集団 OT 群（n=68，男性33名，43.39±9.97歳）に割付けられ，個別 OT 群で2名，集団 OT 群で5名がドロップアウトし，最終的な解析対象は個別 OT 群（n=66）と集団 OT 群（n=63）となった．ベースライン評価では，人口統計学的データと評価尺度は両群で有意差はなかった．退院時または入院3ヵ月後の評価では，個別 OT 群で，BACS の言語性記憶（F=11.23，p<0.01，d=0.58），ワーキングメモリ（F=6.47，p=0.02，d=0.28），言語流暢性（F=21.10，p<0.01，d=0.27），注意（F=22.92，p<0.01，d=0.30），総合得点（F=14.16，p<0.01，d=0.44），IMI の興味・楽しみ（F=16.61，p<0.01，d=0.55），価値・有用性（F=10.67，p<0.01，d=0.46），選択観（F=19.12，p<0.01，d=0.62），IMI total（F=21.77，p<0.01，d=0.61）で有意な改善を示し，CSQ-8が有意に高かった（t=3.28，p<0.01，d=0.59）．

本研究の結果は，統合失調症に対する個別 OT プログラムが精神科病院において実行可能であり，認知機能を含めたアウトカムの改善に有効であることを示している．これらの知見は，精神科病院において個別 OT の普及を促進し，統合失調症治療の質の向上に寄与できる可能性がある．今後の課題は，個別 OT の効果をより詳細に検討することや追試験の実施，個別 OT が再発・再入院に及ぼす影響を検討することである．

研究指導教員　信州大学学術研究院（保健学系）　教授　小林　正義